

岩瀬谷古墳群発掘調査地説明会資料

平成 24 年 (2012) 3 月 17 日 (土) / 財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。

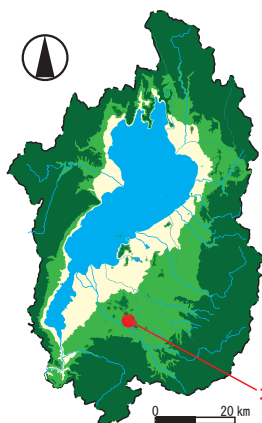


財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

調査の経緯と経過

■岩瀬谷古墳群は、琵琶湖東岸の内陸部にある山の南斜面を南流し、野洲川に注ぐ大砂川流域にあり、湖南市正福寺に位置します。古墳時代後期の群集墳として知られていました。

平成 23 年度に、滋賀県教育委員会からの委託を受け、大砂川補助通常砂防工事に伴う発掘調査を実施しました。



岩瀬谷古墳群



図1 岩瀬谷古墳群の位置

岩瀬谷古墳群とは？

■大砂川流域一帯には、横穴式石室をもつ古墳が分布することが確認され、岩瀬谷古墳群として周知の遺跡として登録されています。岩瀬谷古墳群は、数基程度からなる小グループから構成されており、これらの小グループをA～F支群と呼んでいます。新設砂防堰堤の堆砂域内には、C・D支群が含まれます。C支群では堆砂域から外れた位置に横穴式石室1基が開口しているほか、D支群では横穴式石室2基が開口していました。それら以外にも埋もれてしまった古墳が存在する可能性が予想されました。そこで、開口した石室付近を中心に調査区2か所を設定し(1区・2区)、発掘調査を実施しました。その結果、1区ではあらたに1基の古墳を確認しました(C2号墳)。2区では、調査前に確認された3基(D1・2・3号墳)以外に、あらたに1基の古墳を確認しました(D4号墳)。

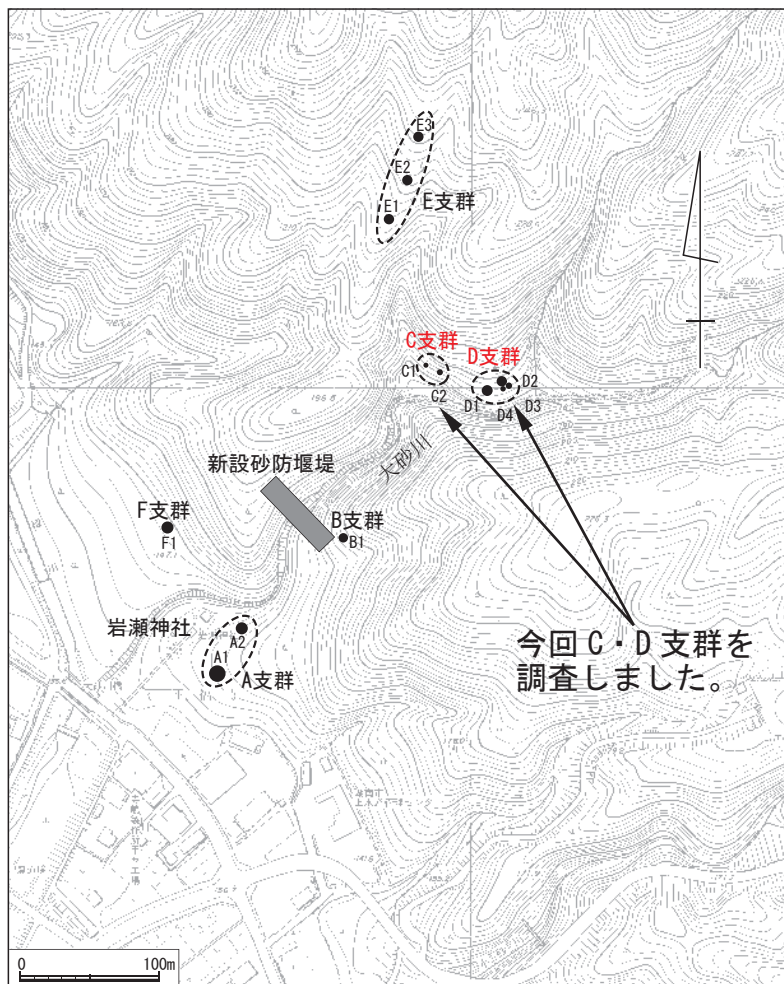


図2 岩瀬谷古墳群の分布状況
黒い丸印が現時点で確認できた古墳。

C 支群の古墳

■C2号墳は、C1号墳の東側にある崖面付近でみつかった横穴式石室墳です。石室は、天井と側壁の一部が崩落によって失われ半壊状態でした。また、墳丘自体が流出しているため、正確な形や規模はあきらかにできませんでした。石室内と崖面の堆積土中から土器類（須恵器蓋杯〔ふたつき：蓋のついたお椀〕・提瓶〔ていへい：壺の一種〕・土師皿）、鉄器類、玉類（ガラス小玉・土玉・滑石製白玉・緑色凝灰岩製素玉・同管玉）が出土しました。



図4 C2号墳の横穴式石室

図3 C支群の古墳

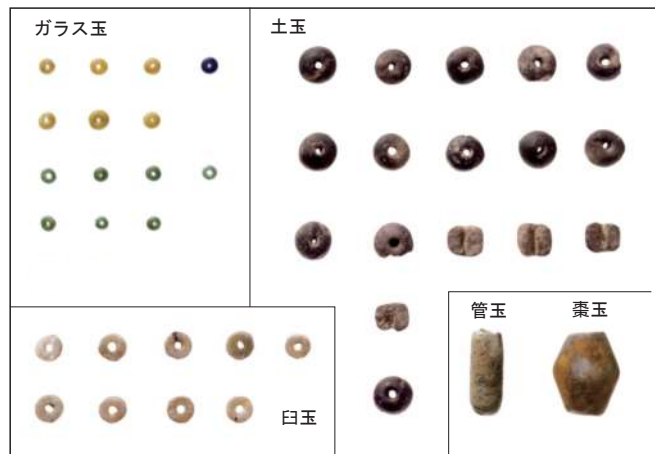
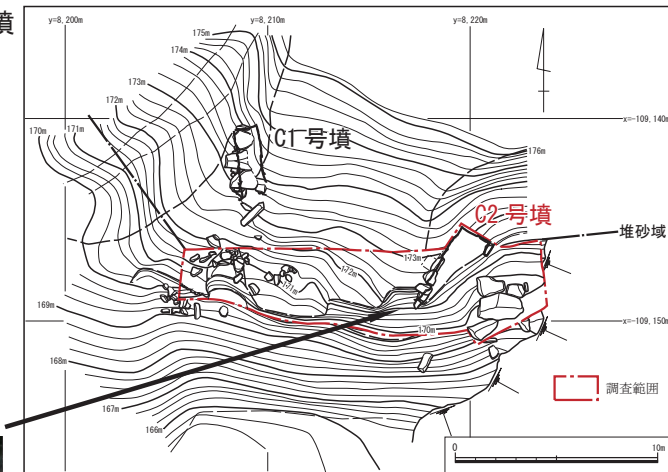


図5 出土したさまざまな形と材質の玉

D 支群の古墳

■調査前の段階では、石室3基（D1・D2・D3号墳）が開口していましたので、周辺を含めて発掘調査したところ、あらたに1基の横穴式石室を検出しました（D4号墳）。

■D1号墳は石室の一部は開口していましたが、開口部が狭く石室内部の構造は不明でした。発掘調査をしたところ、ほぼ完存する横穴式石室であるとわかりました。石室の全長は約7.6mで、今回調査した5基の石室のなかで、最大の規模を誇ります。石室の入口（羨道）部付近には、閉塞石（へいそくせき）が一部残っていました。墳丘は盛土が流出しているため、正確にはわかりませんが、径15m程度の円墳であると思われます。石室の入口付近には開口部石列があるほか、墳丘内部には土留めのための墳丘内石列が確認できました。石室内からは、副葬された遺物（須恵器〔蓋杯・高杯〔たかつき：足付きのお椀〕・提瓶・壺等〕・土師器〔杯〔つき：お椀〕〕、鉄器類〔鉄刀・銀象嵌鐔〔ぎんぞうがんつば〕・鉄鏃〔てつぞく：鉄の矢じり〕〕のほか、中世の遺物（黒色土器〔こくしよくどき〕・瓦器〔がき〕・土師皿、銅銭）が出土しました。



図6 D1号墳の全景



図7 D1号墳の石室

■D1号墳の石室床面からは、銀象嵌鐔（ぎんぞうがんつば）1点が出土しました。鐔とは、刀の柄と刀の身にはさんで、柄を握る手を防御するための部品です。今回出土した鐔は倒卵形の板状品で、長軸約6cm・短軸約5.1cm・厚さ約0.8cmの鉄製品です。鏽落としをおこなったところ、鐔の側面で銀象嵌を確認しました。象嵌とは、銅・鉄などの金属に紋様を彫りこみ、そこに別の金属（金銀等）をはめ込む装飾技法です。

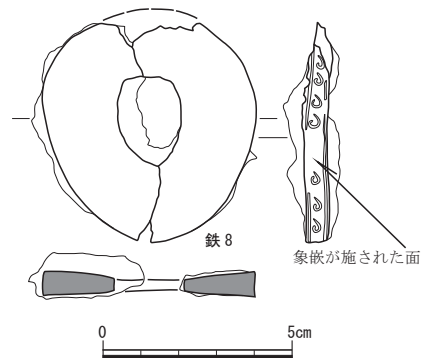


図8 D1号墳から出土した銀象嵌鐔

表1 調査した古墳一覧

遺構名	墳丘		石室		出土遺物	時期
	形態	規模(m)	形態	規模(m)		
C2号墳	不明	不明	両袖式?	全長4.2以上, 玄室幅1.6, 玄室長3.2	須恵器(杯身・提瓶), 鉄器(鉄鏃等), 玉類(ガラス小玉・土玉・滑石製白玉・緑色凝灰岩製瘡玉・同管玉)	後期後葉～末葉 (6世紀後半)
D1号墳	円墳	約15	左片袖式	全長7.6, 玄室幅1.9～1.65, 玄室長3.45, 玄室高2.2, 羨道長3.85, 羨道幅1.1～1.3, 羨道高1.55	【古墳時代】須恵器(蓋杯・高杯・壺・提瓶)・土師器(碗), 鉄器(鉄刀・現象嵌鐔・鉄鏃) 【中世】黒色土器・瓦器・土師皿・銅銭	後期後葉～末葉 (6世紀後半)
D2号墳	不明	不明	両袖式	全長5.6, 玄室幅1.75, 玄室長3, 玄室高2.3, 羨道幅1.2, 羨道長2.4	【古墳時代】須恵器(蓋杯・高杯等)・鉄器(不明鉄器), 玉類(ガラス小玉) 【中世】黒色土器・瓦器・土師皿	後期後葉～末葉 (6世紀後半)
D3号墳	不明	不明	左片袖式	全長3.45, 玄室幅1.2, 玄室長1.85, 玄室高1.7, 羨道幅0.8, 羨道長1.45以上	【古墳時代】須恵器(高杯・甕), 鉄器(刀子・不明鉄器) 【中世】黒色土器・瓦器碗・土師皿	後期後葉～末葉 (6世紀後半)
D4号墳	不明	不明	左片袖式	全長1.98, 玄室幅0.8, 玄室長1.32, 羨道幅0.64, 羨道長0.3以上	【古墳時代】須恵器(蓋杯), 鉄器(刀子), 玉類(ガラス小玉) 【中世】土師皿	後期前葉～中葉 (6世紀前半)

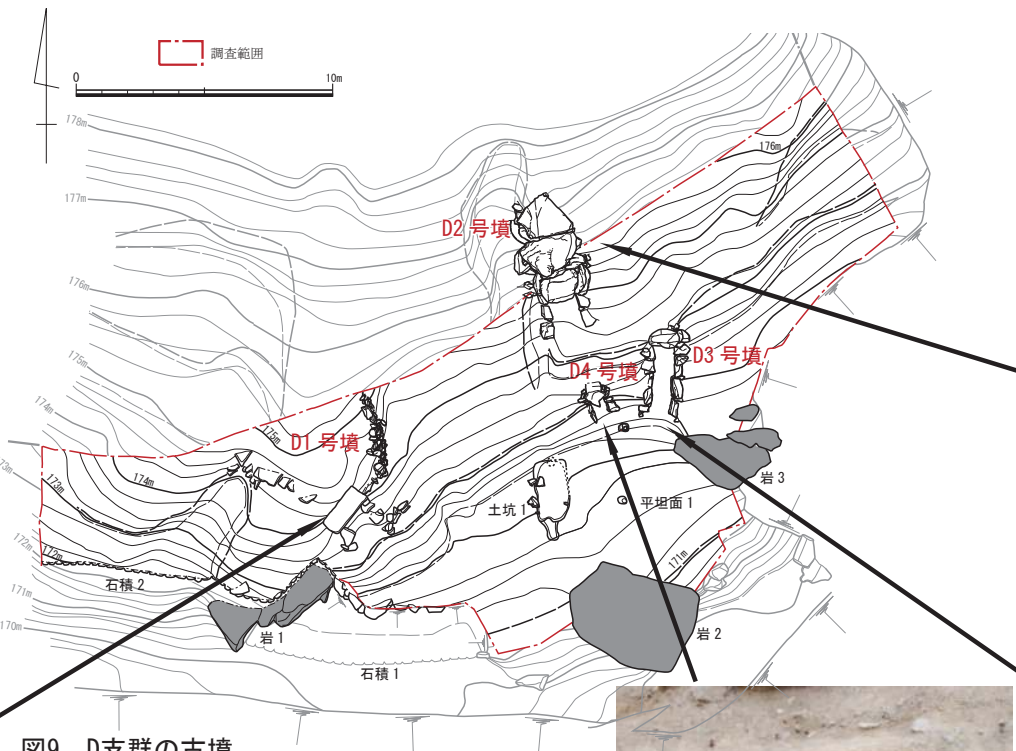


図10 D2号墳の石室



図12 D4号墳の石室



図11 D3号墳の石室

図9 D支群の古墳

■D2号墳はほぼ完存する横穴式石室です。石室の全長は約5.6mで、平面形態は両袖式です。石室の入口部付近には、閉塞石が一部残っていました。墳丘は盛土のほとんどが流出しているため、正確な形・規模は不明です。石室内からは、副葬された遺物(須恵器〔杯蓋・高杯等〕・不明鉄器・ガラス小玉)のほか、中世の遺物(黒色土器・瓦器・土師皿)が出土しました。

■D3号墳は天井部と側壁の一部を失った状態で横穴式石室を検出しました。石室の全長は約3.45mで、平面形態は左片袖式です。

■D4号墳は、発掘調査の過程であらたに発見した石室です。石室の全長は約1.98mで、今回調査した石室のなかで最も小型の横穴式石室です。



図13 矢穴石

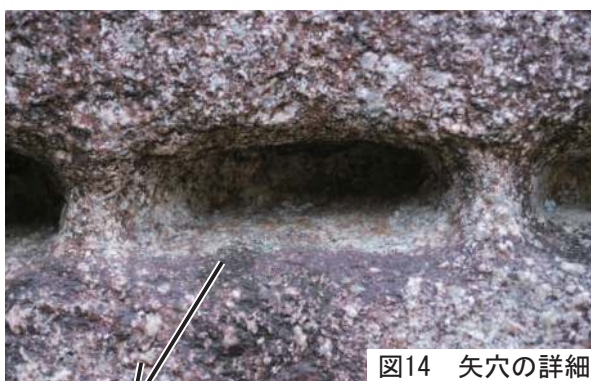


図14 矢穴の詳細

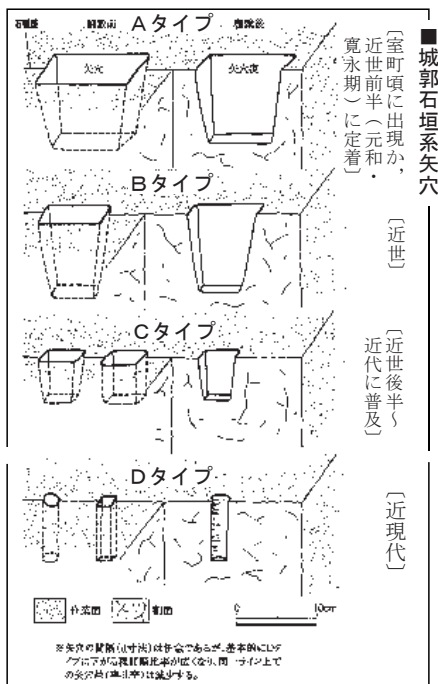
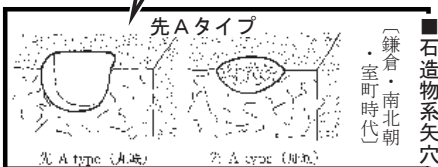


図15 矢穴の基本型式分類模式図
 (森岡秀人・藤川祐作「矢穴の型式学」
 『古代学研究』180 2008年、一部改変。)

中世の石切り場

■2区では、古墳の前面斜面が人工的に造成され、平坦面が作られていました。そのさいに石室が破壊され、開口した石室内に人々が入り出したようで、石室内からは中世土器（黒色土器・瓦器・土師皿等）が出土しています。D1・2号墳の石室の側壁には煤の付着が認められましたので、石室内で火を焚くなど、石室内をなんらかの活動場所として使用していた可能性もあります。

■岩瀬谷のような山間部での活動はどんな目的だったのかを考えるうえで注目されるは、2区東側の大砂川床でみつかった矢穴石（やあないし）です。高さ約2m、平面の長軸約2.7m・短軸約1.9mを測る花崗岩の大きな岩です。矢穴石とは、石を一定の大きさに切り出すことを目的として石に彫りこまれた穴（矢穴：やあな）を残した石のことです。矢穴は長さ約13～15cm・深さ約8～9cmで、列をなして彫りこまれています（矢穴列）。矢穴列は上下2列あり、上段は7穴が、下段は6穴の矢穴が列状に並んでいます。上下の矢穴列の幅は約1mでした。矢穴石の存在は、そこで石の切り出し作業が行われた痕跡です。石を切り出そうとして、矢穴を彫りこんだけれども、なんらかの理由で作業を中止し、そのまま放置されたものと考えられます。

■近年矢穴の研究が進められ、矢穴の形状・大きさ等からおおまかな時期が判定できるようになりました。こうした研究成果によると、今回見つかった矢穴は、中世（鎌倉～室町時代）に各種石造物の製作で用いられた技法の矢穴に相当することがわかりました。

■矢穴から想定される採石の時期と、遺跡周辺一湖南市域には、「史跡廃少菩提寺石多宝塔および石仏」をはじめ、鎌倉時代～室町時代の石塔等の各種花崗岩製石造物が数多く分布していることを考え合わせると、石造物の石切り場であったと考えられます

まとめ

今回の調査成果の意義は以下の2点です。

①湖南市域の後期群集墳の様相が明らかとなったこと

岩瀬谷古墳群のような後期群集墳は、それ以前の古墳の大半が首長の墓であったのに対して、下位階層の、具体的にはムラムラの有力家長層の墓であったと考えられています。岩瀬谷古墳群は複数の古墳グループによって構成されていて、おそらくそれらのグループの有力家長が代々築造した墓地であったと考えられます。さらに、岩瀬谷古墳群の周辺には、やはり後期後葉～末葉頃の大規模石室をもち、有力家長層とは一線を画した首長墓と目される塚穴古墳や、岩瀬谷古墳群と同様の後期群集墳がいくつか確認されています。今回の調査によって、古墳時代後期後葉～末葉頃に、現在の湖南市域には、塚穴古墳の首長とその配下に複数の有力家長層からなる地域社会が形成されていたことがわかってきました。さらに、今回調査した石室のうちで最大規模のD1号墳から銀象嵌鐔が出土したことは、古墳群を構成した有力家長層間の中で他より有力者であった等の力関係を表すと考えます。

②中世の石切り場を確認したこと

次に注目されるのは、今回の調査によって、遺跡付近が中世の石切り場であったことがわかったことです。近江地域には、中世の石造物が多数あります。しかし、それらの石材採取場所については、米原市曲谷（まがたに）や日野町蔵王付近等で推定されていたものの、実際に矢穴石等は未確認であり、確実にわかる例はほとんどありませんでした。今回、中世の石切り場を捉えられた点が大きな成果といえます。岩瀬谷では、今回みつかった矢穴石以外には、矢穴を残す岩等はみつけれませんでしたので、比較的小規模な石切り場だったと考えられます。野洲川流域の谷筋は同様の花崗岩地帯が多くあります。今後周辺域を分布調査することで、同様の石切り場が発見される可能性があります。